

---

# 年賀状

ハイ様

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

年賀状

### 【Nコード】

N0867BA

### 【作者名】

ハイ様

### 【あらすじ】

とりあえず処女作です

大学生になって1年目の俺に

年末に起こった小さな出来事です！

(フィクションに決まってんじゃん)

「・・・こいつはなしか、こいつはありで、、よし！」  
長年使用して表紙が落ちそうな手帳を閉じて、  
書き留めた目線を移す。

「今年は親も入れて5人か。  
まあ、少ないほうが楽しな。」

今年もクリスマスが終わって、あと5日で新年を迎える12月27日。

早めに用意する習慣が全くない俺は年賀はがきすら買ってない状況だったが、  
コタツにみかんという姿で、

あせりなんて燃えるゴミの日に一緒に出したかのようにのんびりしていた。

「年賀はがき買いに行くのイヤだな、  
そついや普通のはがきなら5枚くらいあったかも。」  
とにかく寒いのが嫌いな俺は、冬は鍋、みかん、コタツとTV。  
大学のサークルではサボり常習犯になっている。

ただ新年の挨拶くらいは、ちゃんとしておくべきだろうと思ったのである。

しかし、友達は大体サークルで同じなうえ、  
初詣という謎な活動が1月2日にあるため、  
互いに年賀状は出さないようにしたので、たった5枚だけである。

「あつたあつた、  
今年の手書きか。」

実家にはパソコンもプリンターもあるのだが、  
一人暮らしをしている俺は持っていない。  
今時持っていないのは珍しく、友達の家で貸してもらったのもよかつたが……

寒いので外には出たくない！それに限る

「文字だけでもいいけど、なんとなく寂しいな……  
イラストでも描いてみるか」

スラスラ……ケシケシ……スラスラスラ……  
皆さんご覧の通り、絵が上手なわけもない、小一時間の健闘の末  
「描けた、完璧だ。」

そこに描いてあったのは一匹のウサギ。  
小学生レベルではあるが、一応ちゃんとウサギに見える。

「親には文字だけでいいか、  
恥ずかしいしな……（笑）」

次のはがきに移ろうとして、ふと時計を見ると7時。  
TVの特番が8時からなので、鍋の用意をすることにした。  
もう4日連続鍋だな。

毎年、実家でTVと一緒に年越しのカウントダウンをして、歳が明けたら家族みんなで神社に初詣に行くのが、元旦の常である。家から歩いて5分くらいのところの林の中にある神社で、真夜中とは思えないほど人があふれていて、近所の友達ともよく出会う。

林の中では月光はさえぎられて真っ暗になっており、動物の気配なんて全くしないほど静かなんだけど、神社までの道は提灯で明るく照らされて、人もたくさんいて賑やか。

その道を俺は今走っている。  
元旦なのに提灯もなく、人も一人もいない。  
石畳がとても冷たく光を反射している。

そして、家へ全力で走る理由は林の中にあつた。

真っ暗な林の中に、  
ぽつんと2つの赤い光がきれいに横に並んでいた。  
不思議に思つて、林に入ろうとカサリツと掻き分けた瞬間、  
その2つの光はこちらを見たような気がした。  
そして、まるで星空とも思えるほどの赤い光が現れた。

さきほどまで、あれほど賑わっていた人々は、  
泡がはじけたのかのように消え去り、  
提灯は闇と化してしまった。

この不思議な状況に、

思考はおろか心臓まで止まっているのではないかというほど立ちすくんでいた俺だったか、いきなり足が動いた。家に向かって走り出したのだ。本能があれば危ないと騒ぎ立てる。暗い夜道は長く感じる。それを痛感しながら走る。とにかく走る。

後ろから大量の何かが追いかけてくる音がだんだん聞こえてくる。絶対に後ろをいけない気がする。なぜだかわからないが第六感がそういつてるのだ。

泣きたくなってきた。目をつぶって現実を見たくなくなった。そうしたら助かるのではないかと切望した。それでも走った。逃げ切るために、助かるために。

うつすら出かけた涙を拭おうとした瞬間、、、こけた。視界の下部が見えにくくなっていたのだ。

全力で走っていたのに、受身もまともに取れなかったため、少し転がり、林の間から空を見上げる形で止まった。そこには月がなく、星もなく、ただ暗闇だけが広がっていた。その空が落ちてきたように見えたので、とっさに目をつぶり、丸くなって頭を守った。落ちてきたのは空ではなく、何かのまれて流された。

はっと目が覚めたのは午前6時。

天井で輝いている電灯に目がくらむ。

いつのまにやら寝てしまっていたらしく、

コタツの電源は切れていたが、

コタツの上に置いてある鍋は、石のように冷たく座っていた。

「野菜はシワシワ、肉は硬くなっているけど朝食はこれでいっか」

コタツの電源を入れ、鍋を温めなおすために火をかけると、

部屋は段々と暖かくなっていった。

鍋が温まった頃には、

窓についた水滴がキラキラと輝いていた。

「それにしても変な夢だったな、

今年は実家に帰る予定ないし。

もしかして実家をはなれて8ヶ月、ホームシックになったのか？」

そんなことを冗談のようにぼやきながら、朝のニュースをつけてみる。

朝は晴れているけど、夕方からは天気が崩れて夜には雪が降るらしい。

「たぶん食料調達のとしまでに年賀状はできないだろうな。

明日出しても間に合ったかな、たぶん大丈夫だ。」

一人暮らしをはじめて、勝手に納得することが増えたと思う。

そんなことを考えながら鍋をつついてみると、

ケータイが光っていることに気がつく。

家でも大学でも基本的にマナーモードにしているため、

メールは遅れてもいい内容、



電話でも根気よく掛けてもらわなければ出ることはない。

メールは友達からであり、内容は昼から鍋パーティーをするらしい。俺が鍋を食っているのを知っているかのような文で、しかも外出しないことも知っているらしく食料は買ってくるらしい。ラッキーだ。

昼の用意をしなくてよくなった俺は、年賀状の続きに手をつけた。

友達に見られて、イラストについていじられるネタみたいなことは起こらなかつたが、

アニメや漫画やら、よくわからないことを永遠と話していた。

結局、開放されたのは夕食が終わった7時半。

雪が降っていたけど、家は近くなので帰っていった。

もちろん見送りはコタツから。

「今日は意外と暑かったし、シャワー浴びるか。

昨日はシャワー浴びれてないし」

シャワーを浴びたあと、鍋を洗う。

さすがにずっと使いまわしていると危ない気もしなくもないからだ。ついでに野菜やらも切ってしまう。

動くときはいっぺんにしたほうがあとあと便利なのは、ここ一年でよく学んだ。

さて、年賀状に取り掛かろうとして、

ふとTVに目をやると、赤い2つの光が映っていた。様な気がした。2度に見ると、何も無い普通の画面で芸人がわいわい言っていた。

「よし、三枚目もできた！・・・ん？」

また、画面に赤い光が見えたので、

後ろを振り返ってみるがドアはちゃんとしまっており、変なことは何もない。

床に落ちている鏡が目に入る。

これを動かなくても後ろが見える位置に配置し、作業を続ける。

作業をしながらも、気のせいだるときどき注意を払っていると

「見えた！」

その光はドアの新聞要れのところにあつた。

わざわざ開いてみていたのである。

暗闇の中に、赤く染まった月のような光がじつとそこを動かさない。そのときは夢のことを鮮明に思い出していた俺は全く動けず、

背中に冷たい空気をほんの少し感じた。

ズルリ・・・

いきなりその何かは細長い新聞入れから入ってこようとした。

ズル・・・ズル・・・ボトン！

完全に進入を許してしまったが、俺の身体はまだ全く動かない。動いてくれない。

部屋の中という安全な場所だと思っていた場所をなくし、

恐怖のせいか涙がこぼれてくる。

夢の中のようになってしまいかもしれないと

後ろ向きな思考のみで支配されていく。

そんなことはおかまいなしに、何かはゆっくりとこちらに近づいてくる。

玄関は暗くなっているが、近づいてくることによって輪郭のみがぼんやりと見えてくる。

目を合わせていたら、また増えるのではないかという恐怖に襲われた俺は、

力強く目を閉じた。

それは間違いだったのかはわからないが、

視界が暗くなつた瞬間、様々の想像が頭を過ぎり、

もう目を開ける勇氣などひとかけらもなかった。

少し時間がたつたと思う。

何も起こらない・・・

目を開けてみようかと思つた瞬間、

シャキ・・・シャキ・・・

最初に思い浮かんだのは野菜をかじる音だった。

目は意外と簡単に開き、音の元はすぐ見つかった。

さつき切った野菜の残りをウサギが食べていたのだ。  
真っ白なウサギは首輪をしており、  
足の裏は雪によって汚れたらしく茶色になっており、  
目は燃えているように真っ赤であった。

「なるほど、こいつだったのか。  
でも、なんでこんなところにウサギが・・・」  
まだ野菜を食べ続けているウサギを拾い上げる。  
それは大切な食料なので、勝手に食べられても困るのだ。  
そのとき、首輪に紙が挟まっているのに気がつく。

「紙？」

住所とか何か情報でも書いてあるのかな」  
その紙を取り、広げてみるとそこには・・・

『来年は辰年ですよ！』

内容に啞然としたが、  
次の日にはウサギは消えており、年賀状は結局遅れて出すことにな  
ってしまった。

#### 4 (後書き)

誤字などありましたらご報告お願いいたします。

感想やアドバイスなどお願いします  
バスバス言っちゃってくださいw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0867ba/>

---

年賀状

2012年1月2日00時49分発行